

靈宝館だより

題字・畚野光義師

靈宝館だより 第114号

平成27年4月30日発行
和歌山県伊都郡高野町高山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山靈宝館
電話0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

開館時間

- 5月1日～10月31日
8時30分～17時30分
- 11月1日～4月30日
8時30分～17時00分
- 休館日 年末年始のみ
- 拝観料

大人	600円
高・大学生	350円
小・中学生	250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。	

■専用駐車場あり

開創法会期間

- 4月2日～5月21日
開館時間を20時00分まで延長します。



172年ぶりに再建された中門と安置された持国天

中門
 再建
 奉修
 庭儀
 大曼
 荼羅
 供者
 為中
 門落
 慶伽

第114号 目次

特別公開・高野山開創千二百年記念展 のご案内	2～3
収蔵品の紹介88	4
高野山の古建築 第十八回	5
高野山の考古学(六)	6～7
考古学から高野山の伽藍 「中門」を考える(その五)	8～9
高野山の文書(四)	10
高野山靈宝館からのご案内	11
靈宝館の庭園	12

開創法会期間限定特別公開
**「高野山三大秘宝と
 快慶作孔雀明王像」**
 高野山開創1200年記念展
「初公開！高野山の御神宝」
 開催中
 5月 5日(日) こどもの日 小・中学生無料

高野山三大秘宝



国宝 寶誓指帰



国宝 諸尊仏龕



重文 飛行三鈷



重文 孔雀明王像

八大童子像



指徳童子像



恵喜童子像



矜羯羅童子像



制多伽童子像



阿耨達童子像



烏俱婆識童子像



清浄比丘童子像



恵光童子像



大日如来鏡像

- 工芸
- 国宝 諸尊仏龕
- 重文 金銅三鈷杵(飛行三鈷杵)
- 大日如来鏡像

- 彫刻
- 国宝 八大童子像(運慶作)
- 重文 不動明王坐像
- 重文 孔雀明王像(快慶作)
- 重文 四天王立像(快慶作)
- 重文 執金剛神立像(快慶作)
- 狩場明神立像(加藤景雲作)

主な展示品 (※は5月21日まで、◇は5月30日から)

- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※

開創法会期間の五月二十一日まで、高野山三大秘宝と孔雀明王像、それに八大童子像全八体を展示しています。

また、高野山開創千二百年記念展も同時開催中です。平成十六年(二〇〇四)に行われた、高野山壇上伽藍御社の保存修理の際、本殿内部から、多様な内容の奉納の品々が発見されました。その中から、御正体(鏡像・懸仏)の一群、刀剣などを初めて公開します。さらには、丹生・高野両明神にまつわる絵画や書跡も多数紹介しています。多くの方の御来山を心よりお待ちしております。

開創法会期間限定特別公開
 高野山開創千二百年記念展
 「高野山三大秘宝と快慶作孔雀明王像」
 開催中 5月21日(木) まで
 「初公開! 高野山の御神宝」
 開催中 7月5日(日) まで



影向丹生明神像



太刀



鉞



円形華鬘形荘嚴具



大日如来懸仏



梵字懸仏



薬師如来像

■ 絵画

- 十一面千手観音菩薩鏡像
- 大日如来懸仏
- 薬師如来像
- 円形華鬘形荘嚴具
- 梵字懸仏
- 華鬘
- 鉞
- 太刀
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 宝寿院
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 西生院※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 地藏院※
- 浄菩提院

■ 書跡

- 国宝 聾瞽指帰 (弘法大師空海筆)
- 国宝 御室御所高野山御参籠日記 (又続宝簡集三十)
- 国宝 阿闍梨祐宝竖義料田寄進状 (又続宝簡集六十四)
- 国宝 金剛峯寺下文案 (又続宝簡集八十六上)
- 国宝 金剛峯寺衆徒言上状案 (又続宝簡集百十二)
- 国宝 両大明神表白 (続宝簡集五十六)
- 山王院大般若経法則
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺※
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺

高野山開創千二百年記念展

「初公開！高野山の御神宝」



解説付図録、好評販売中！
A4、カラー図版多数、一〇〇頁
限定二〇〇部 一五〇〇円(税込)
ホームページでも通信販売しています。

収蔵品の紹介 88



裏面（下は赤外線写真）

墨書銘：権少僧貞暁
承元三年八月十六日供養之

梵字懸仏

梵字懸仏（アーク）一面

鎌倉時代 承元三年（一二〇九）

金剛峯寺蔵

銅製 総高38・2cm 径33・2cm

現在開催中の特別展「初公開！高山の御神宝」では、伽藍御社に奉納された、数多くの御正体（鏡像・懸仏）が展示されています。鏡像は鏡面に仏像や神像が墨で描かれたり直接刻まれているものを指し、懸仏は銅製の鏡や、鏡をイメージした円板に、立体的な仏像や仏を象徴する梵字を取り付けたものを指します。懸仏は名前の通り、柱や壁に懸けて、礼拝の対象とされました。鏡像や懸仏がつくられるようになった背景には、神は仏が姿を変えてあらわれたとする本地垂迹の思想があります。鏡は神社の御神体となるなど、神様の象徴です。そこに仏の姿をあらわすことで神仏習合が具現化され、御正体の礼拝者は神と仏を同時に拝むこととなります。鏡像は平安時代前半まで、懸仏は平安時代後半から鎌倉・室町時代に盛んにつくられました。

今回紹介する懸仏は、平成十六年（二〇〇四）に行われた伽藍御社本殿の保存修理の際に発見された、多数の奉納品のうちのひとつです。鏡面内に、銅板でできた胎藏界大日如来をあらわす種子（梵字）の「𑖀（アーク）」を取り付け、その下に蓮台が鋳で留められています。このような梵字懸仏では、ふつう蓮台も鏡面内に収まるように取り付けられてい

るのですが、本品は蓮台が鏡面の外にある点が特異であり、後付けの可能性も考えられます。胎藏界大日如来は、御社に祀られている丹生明神と同体とされているので、この懸仏は大日如来と丹生明神をあらわしたものだといえます。

背面にある墨書によると、本品は承元三年（一二〇九）に貞暁上人（一一三〇～一二二七年、一心院谷〔現在の五の室付近〕に国宝・不動堂〔明治期に伽藍へ移転〕を造営し、重文・不動明王坐像と国宝・八大童子像を安置）とともに高野山麓の天野社に氣比明神と巖島明神を勧請しました。貞暁上人と北条政子は実の親子ではなく、そのため上人は仏門に入ったのですが、鎌倉三代將軍実朝の死後、次の將軍となる野心があるかと政子に疑われた際、その場で自分の片目をえぐり出して、還俗する気は無いことを示し、以後政子の信頼を得たと伝えられます。

このように天野社や鎌倉幕府とも関わりのある貞暁上人ゆかりの品であり、制作年の分かる本品は、大変貴重な資料だといえます。

（福形）

連載

高野山の古建築

第十八回 金剛峯寺壇上伽藍中門

鳴海 祥博



鎌倉時代の壇上加藍を描いた絵図 鎌倉時代の伽藍の様子を描いた図が江戸時代に模写され、高野山に伝わる古文書「又統宝簡集」に収められている。



再建された中門 残された礎石や二天像、絵図など僅かな手掛かりから、鎌倉時代の中門の姿を思い描き、多くの職人さん達の技を結集して再建された。



中門用材の伐採 樹齢三百年以上の檜の大木 70 本余りを伐り出し、用材とした。急斜面での大木伐採はまさに命がけの作業である。



中門の組み立て作業 高野山で育った「檜」は、伐採、製材、墨付け、加工、組立と沢山の人の手を経て、中門という新たな建物の一つ一つの部材に生まれ変わった。

今年、東塔は一四一年後の昭和五十九年でした。そして今年、一七二年ぶりに中門がようやく再建されたのです。

中門は壇上加藍の正門です。弘法大師が壇上加藍を結界した時は鳥居の形式であったと伝えられていますが、詳しいことは分かりません。記録によれば、承和一四年（八四七）に弘法大師の遺志を受けて「一階三間」の中門が建立され、その後鎌倉時代の建長五年（一二五三）に「五間三戸楼門」という形式に改められたとされています。

今から十年ほど前、高野山開創一千二百年に向けてこの中門を再建しようという構想が持ち上がりました。「新築」ですが、できるだけかつて建っていた中門の姿を再現することを目指しました。手掛かりは残されている礎石と僅かな絵図、そしてかつて中門に安置されていた火災の際に救出された二天像です。

納骨信仰の展開④

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一

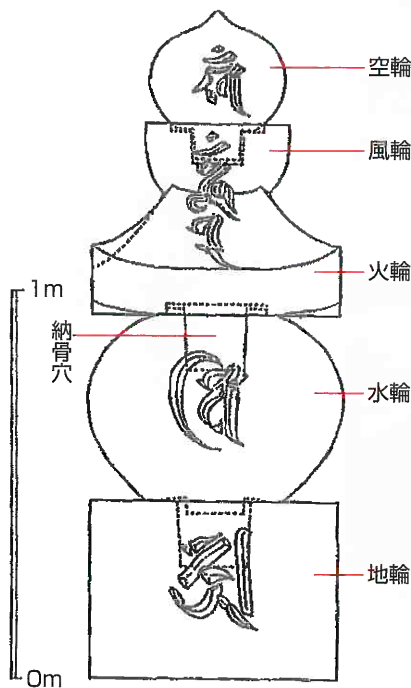
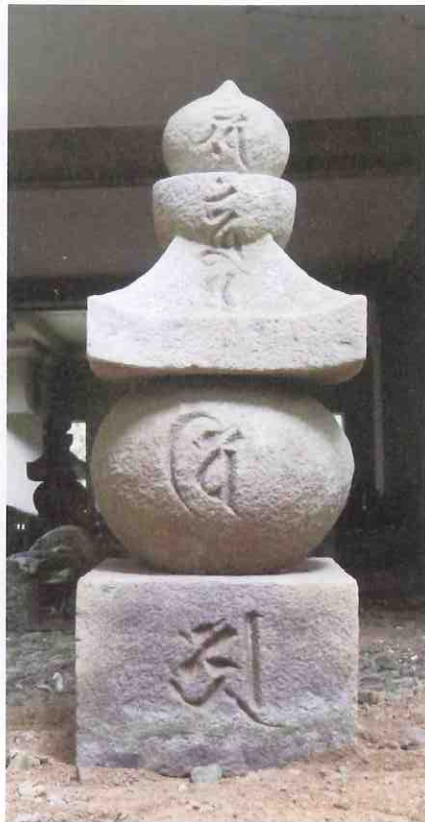


図1 奥之院出土の五輪塔

昭和三九年の工事では、前回ご紹介した大量の土器・陶磁器群のほか、五輪塔などの石塔（石で作られた塔）が多数出土しました。今回はこの時の調査で出土した古い五輪塔を中心に、高野山の石塔と納骨についてお話しします。

出土した石塔の多くは、複数の石材で構成される組合せ式の五輪塔と一石五輪塔という小型で簡易な塔です。一石五輪塔については別の機会にお話ししますので、今回は組合せ式の五輪塔（以下五輪塔とします）を中心に検討してみます。

五輪塔について

本題に入る前に少し五輪塔について記しておきます。五輪塔とは、経典に説かれる五大思想の地・水・火・風・空の図形（それぞれ、四角形、

円形、三角形、半円形、宝珠形）を立体化して積み重ねたもので、各部を地輪、水輪、火輪、風輪、空輪と呼びます（図1）。

平安時代後期に舍利信仰を背景として、おそらく真言宗のなかで舍利を奉安する小仏塔として、我が国で創造されたものと考えられます。その後、鎌倉時代後期以降には全国各地で多く造立され、墳墓の標識として広く受容されるようになり、江戸時代初期までは日本の墓石の中でもポピュラーなものでした。

奥之院出土の古い五輪塔

一般に石造の五輪塔は、四石で構成されているものが最も多いのですが、高野山では全部を二石で彫出するもの、水輪以下と火輪以上の二石で作るもの、地輪・水輪と火輪以上

に分けるものなど多種多様です。高野山に五輪塔が登場した初期の頃には、まだその各部の構成に試行錯誤を繰り返していたようです。

ところがこれら古い一群の五輪塔には、一石で彫出されたものを除いて、水輪の上面から納骨のための穴が穿たれているという共通項があります。しかもこれらに共通するのは、水輪上部から単純に穴を開けるのではなく、入口の周囲を少し高く作って柄の役割も兼ねていることです。そして、その上に乗る火輪の裏側を見ると、そこには水輪の柄部分の直径よりも少し大きな円形に浅く削り抜かれた穴があり、それが蓋になっていたことはすぐに理解できます(図2)。



図2 火輪裏面と水輪上面の納骨穴の様子

これほど丁寧な造形されたものは少なく、高野山の五輪塔がいかにか丁寧な作られたかがわかります。

さらにこれらの五輪塔は、そこに刻まれた年号から十三世紀後期から十四世紀中期の間に集中していることが知られます(表)。これより新しい時期の五輪塔には、水輪に納骨穴を穿つ例はなく、高野山ではごく初期のものに限られて採用されたという理解できます。前回の報告を思い出していただけ

(無銘塔を除く)

表 高野山の納骨穴保有五輪塔一覧

所在地	元号	西暦	石材	納骨穴の位置
西南院	弘安七年	1284	砂岩	水輪上から穿つ
霊宝館(奥之院出土)	正応二年	1289	砂岩	水輪上から穿つ
霊宝館(奥之院出土)	永仁六年	1298	砂岩	水輪上から穿つ
奥之院浅田入道銘	正安三年	1301	砂岩	水輪上から穿つ
奥之院玉川畔尊覚銘	正安四年	1302	砂岩	水輪上から穿つ
奥之院鎌倉常華寺長老銘	嘉元三年	1305	砂岩	水輪上から穿つ
奥之院出土橘維安銘	嘉元四年	1306	花崗岩	地輪上面に穿つ
奥之院出土	嘉暦二年	1327	砂岩	水輪上から穿つ
二十二町石左	貞和三年	1347	砂岩	水輪上から穿つ

ればわかるように、この時期は、土器や陶磁器による納骨が小型化する傾向にあり、納骨信仰の受容層が拡大し低層化したと理解しました。その反面、五輪塔という最新の仏塔形式を採用するだけでなく、構造に手間暇のかかる石塔への納骨には、多くの経費がかかったことは間違いな

納骨を行った人はやはり高位の人物であったと推測できます。

納骨信仰の変化

ここで、鎌倉時代後期の奥之院における納骨の様子を整理しておきましょう。土中へ埋納したり堂内に奉納したであろう納骨器は、輸入陶磁器から国産陶器、在地の土師器などへ広がり、規模も大型のものから小型のものまで存在します。ここに石塔内へ納骨するというスタイルが付け加されていきます。つまり経費がかかるものから簡易なものまで、納骨の形態が多様化していることがわかるのです。

しかし、十四世紀中期を過ぎるとこれらは一斉に下火となってしまい、以後、五輪塔は納骨穴を持たないものが流行し始め、大小の土器・陶磁器を使った納骨も姿を消してゆきます。この頃を境にして、奥之院への納骨形態は大きく変化してゆきます。

【参考文献】

狭川真一 二〇一四「高野山奥之院の納骨信仰」『考古学雑誌』第九八巻第二号、日本考古学会

考古学から高野山の伽藍「中門」を考える (その五)

発掘調査成果から8期中門の建造物を再建



写真1 再建された8期中門 (写真手前の白い標示は7期中門礎石跡)

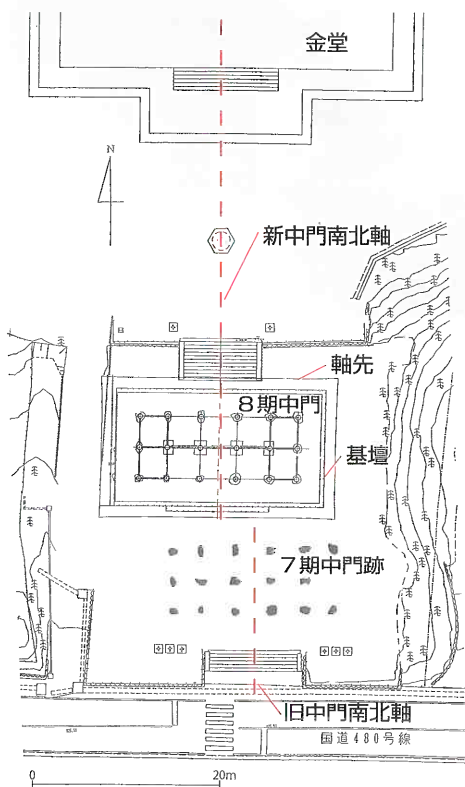


図1 中門配置図

この度、「高野山開創千二百年記念大法会」の記念事業として再建された中門は、中門の歴史上、「8期中門」に相当します(写真1・表1参照)。再建にあたり、平成十八年度から十九年度にかけて、三次に及

ぶ発掘調査が行われました。その結果、いくつもの貴重な成果がありました。主な成果としては、①調査前に露出していた礎石が天保十四年(一八四三)に焼失した7期中門のものであったこと、②7期中門の礎石の直下には5期・6期にわたって用いられた礎石が確認され、またこのことにより中門建物の南北軸方向は5期から7期を通じ共通していたこと、

③5期中門(建長五年(一二五三)建立・安永三年(一七七四)焼失)、6期中門(安永八年(一七七九)建立・文化六年(一八〇九)焼失)は、文献のとおり火災により焼失したと、④5期中門、6期中門、7期中門の雨落ち溝がそれぞれ検出され、建物上部の屋根の軒出は再建の度に大きくなり、荘厳が図られたこと、⑤7期中門跡では二代目二天像(持国天・多聞天)が安置された場所が

確認されたこと、⑥5期中門の下層では、九世紀末ないし十世紀初頭から十一世紀後半にかけての道路状遺構を検出、高野山町石道の遺構が確認されたことが挙げられます。しかし、再建に当たっては、二つの検討課題がありました。まず一つ目は、地表面に露出する7期中門の礎石群、そしてその地下には5期、6期中門の建物を支え続けた礎石があることから遺構保護を前提とすること。そして二つ目は、露出する7期礎石群の南側には、国道四八〇号線が通り、原位置で再建すると建物が道路に近接するため、歩行者の安全を確保することです。

これらの解決方法を模索するため、発掘調査の成果を考古学、建築史、文献学、史跡整備などの専門家の意見を取り入れながら、文化庁などと協議を行いました。

ちなみに、現在の金堂は昭和元年(一九二六)に焼失し、同九年(一九

表1 中門及び二天像変遷表

中門					二天像					その他遺構	
時期区分	年号(西暦)	状況	位置	概要	時期区分	年号(西暦)		概要	時期区分	概要	
1期	弘仁10年(819)	建立	壇上金堂前	鳥居状の簡易な施設を建立							
2期	承和14年(847)	再建	壇上金堂前	簡単な形式の門を建立					9世紀末・10世紀初頭~11世紀後半	高野山町石道を検出 ※道路状遺構を検出	
3期	永久3年(1115)	再建	壇上金堂前	三間一階の八脚門を建立							
4期	永治元年(1141)	移建	壇上南側の現在の中門跡地	3期中門の三間一階の八脚門を、現在の中門跡地に移建		永治元年(1141)	新造	4期中門の建立(3期中門の移築)に際し、二天像(持国天・多聞天)を新造			
5期	建長5年(1253)	再建	壇上南側の現在の中門跡地	五間二間の楼門形式に造替 ※礎石及び雨落ち溝の遺構検出	初代	建長5年(1253)	移設	5期中門の再建とともに再安置			
	安永3年(1774)	焼失				安永3年(1774)	免災	5期中門は焼失するが、二天像は免災			
6期	安永8年(1779)	再建	壇上南側の現在の中門跡地	五間二間の楼門を再建 ※礎石及び雨落ち溝の遺構検出		安永8年(1779)	移設	6期中門の再建とともに再安置			
	文化6年(1809)	焼失				文化6年(1809)	一部免災	6期中門は焼失するが、二天像の御手天衣等は取り出される			
7期	文政3年(1820)	再建	壇上南側の現在の中門跡地	五間二間の楼門を再建 ※礎石及び雨落ち溝の遺構検出		文政2年(1819)	造立	文化6年(1809)の6期中門火災時に取り出された初代二天像の御手天衣等を取り合わせて造立。施主は阿州藩士蜂須賀主殿、仏師は京仏工塩釜による。 ※安置場所の基礎遺構検出			
	天保14年(1843)	焼失			天保14年(1843)	移設	二天像免災				
					二代目						
8期	平成27年(2015)	再建	壇上南側の現在の中門跡地(但し、再建位置は7期中門跡の北西に変更)	五期中門の建築様式及び規模に倣い、五間二間の楼門を再建	平成11年(1999)	移設	長らく西塔に仮安置されていたが、大塔に移設				
					平成27年(2015)	安置	二天像は全解体修理 広目天及び増長天を新造し、四天王として8期中門に安置 (修理及び新造は仏師松本明慶作)				

三四)に再建されたものですが、金堂再建時点で中門の建物はなく、また露出する礎石群は7期中門の火災後約八〇年を経ていることから、本来の原位置を示すものかどうか疑問しいとの見方があったようです。

またこの頃の金堂(先代の金堂)は法会に集会する職衆や参拝者の収容人数が増加し、床面積の規模が手狭になっており、この問題を解決するために、再建する金堂(現在の金堂)は先代金堂の床面積の規模を上回り、西側に拡張したものとなりました。

そのため、同じ中門跡地ではあるものの、古来踏襲されてきた金堂と中門を結ぶ南北軸が西側に移され、再建位置に関しては現在の金堂の南北軸上で、露出する7期中門の北西の位置に移して再建することとなりました。(図1)

また、再建される建築様式の年代は、弘法大師空海の時代に出来るだけ近い時代のもの、つまり古い様式のもの、を再建するという方針を立て、発掘調査で確認された最も古い中門遺構の年代に合わせて、建長五年(一二五三)に建立された5期中門の年代、つまり十三世紀の建築様式とし、五間三戸楼門、木造の入母屋造、屋根は檜皮葺とする計画を打ち立てました。

建物規模については、発掘調査において検出した礎石の柱間を基に、桁行五間(一七・二七一m)、梁間二間(六・六六六m)、また5期中門の雨落ち溝の規模から、建物の東西幅二五・六〇六m、南北幅一五・〇〇〇m、さらに二天像の規模から、高さ一六・二五二mの建物が設計されました。この大きさは、大門の三分の一ほどの大きさです。このように8期中門は、平成十七年度の発掘調査に始まり、平成二十七年度の再建に到るまで、綿密な歴史検証を経て、あたかも「新たな文化財を創る」が如く事業が進められ、実に約十年の歳月が費やされました。

一見すると宗教活動と文化財保護は相反するような印象を受けますが、両者が調和してこそ中門の再建は意味を持ちます。

したがって、今回の再建ケースは、今後の建造物の再建の在り方を示すモデルケースと言えるでしょう。

中門再建によって、先人から守り伝えられた高野山固有の宗教文化を守り、また周囲の景観保全を図る効果が期待され、高野山という宗教都市が未永く後世に守り伝えるための宗教建築物となることを願って止みません。

(鳥羽)

高野山の文書 (四)

重要文化財 執金剛神立像(金剛峯寺) 納入文書について



重文 執金剛神立像 (左同)

執金剛神立像は、深沙大將立像とともに重要文化財に登録され、快慶作と伝わる像です。平成二十三年(二〇一一)の破損から保存修理が行われ、それに伴い、像内の様子も調査研究されてきました。

今回紹介するのは、平成二十五年度からの保存修理で像内から取り出された文書です。この文書は、像内胸部に鏝によって留められていたもので、七通の宝篋印陀羅尼でした。宝篋印陀羅尼は、仏像の中に納入すると、叶わない願いはないと信じられ、この時代多く像内に納入されました。

七通のうち一通には、奥書に「南無阿弥陀仏依御勸進書了願以此結縁必可預御利益為二親始乃至法界平等利益 建久八年三月廿八日源阿弥陀仏」と書かれています。内容は、「南無阿弥陀仏の勸進により宝篋印陀羅尼の書写をしました。願わくはこの結縁(造像に関

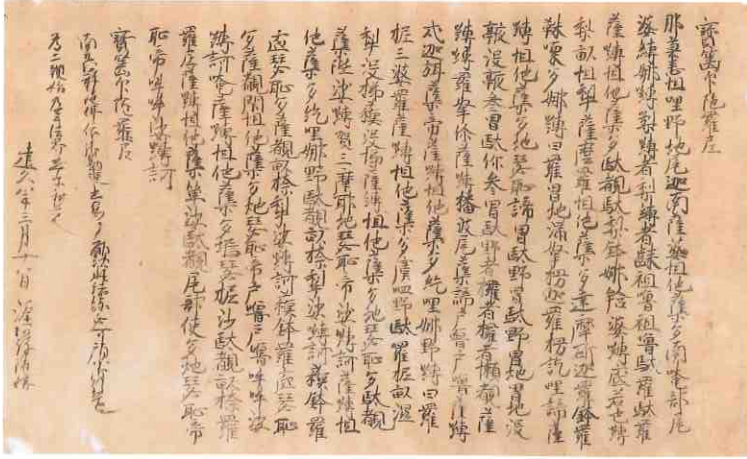
わった縁)で両親を始め、すべての世界に平等に御利益がありますように。」というものです。

ここで重要な点は、「南無阿弥陀仏」と「建久八年(一一九七)三月廿八日」です。「南無阿弥陀仏」とは重源のことを示します。重源(一一二一〜一二〇六)は、治承四年(一一八〇)の平氏の南都焼き討ちにより大部分を焼失した東大寺の再建に努めたことで有名です。執金剛神立像の造立自体の勸進の記述はありませんが、重源が像の造立にも関係していたと考えられます。また、「建久八年」の記述から、像が完成したであろう時期がわかるようになり、また、建久八年三月頃、執金剛神立像は造られ、重源がそれに関係していたことが判明したといえるでしょう。

重源の『南無阿弥陀仏作善集』の高野新別所条には、四天王像

などとともに「執金剛身深蛇大王像各一体」が、重源が再興した高野山新別所(現在の真別処円通律寺)に安置されていたことが記されています。この「執金剛身深蛇大王像」が、金剛峯寺の「執金剛神立像」「深沙大將立像」と同一のものか長らく議論されてきました。この納入文書によって、同一のものであるという説は信憑性を増しました。今回の納入文書の発見・調査では、他にも様々なことがわかりましたが、今後の研究成果が待たれます。

執金剛神立像は、江戸時代末期には四天王像や深沙大將像とともに、壇上伽藍の六角経蔵に収められていました。その後金堂に移り、戦前の絵はがきには、金堂の須弥壇上に安置されている執金剛神立像が写っています。昭和元年(一九二六)十二月二十六日未明の火災により、本尊や諸仏を含めて金堂は焼失しました。しかし、大正十年(一九二一)に開設された霊宝館に収蔵されていた執金剛神立像は、この火災をまぬがれて、現在までその姿を残しています。今回紹介した納入文書も、もしかしら火災に遭い、日の目を見ることがなかったかもしれません。(研合)



「執金剛神立像」納入文書 (画像提供: 奈良国立博物館 撮影: 佐々木春輔)



あべのハルカス美術館



サントリーミュージアム

■高野山霊宝館からのお知らせ
 「高野山の名宝」展
 大盛況に会期を終える
 東京・サントリーミュージアムと
 大阪・あべのハルカス美術館で開催
 しました展覧会が終了しました。
 会期中、サントリーミュージアム
 (開催期間58日)は95,033名、
 あべのハルカス美術館(開催期間45
 日)は71,579名もの来場者が
 あり大盛況でした。来場者は、出陳
 品を通じて、高野山への思いを馳せ
 ておられました。

高野山霊宝館からのご案内



徳川家霊台外観

◎文化財特別公開事業
 ◎重要文化財 徳川家霊台内部を公開
 ※但し、内部には入れません。
 〈日時〉 ①5月9日(土)～17日(日)
 ②11月1日(日)～8日(日)
 午前9時～
 午後4時30分



重文 木造阿弥陀如来坐像 (地藏院)

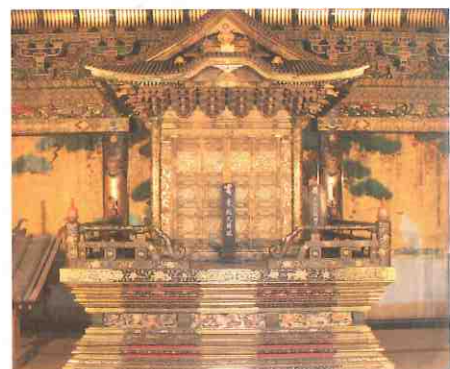
◎第三六回高野山大宝蔵展
 「高野山の名宝」展
 〈日時〉 7月11日(土)～9月27日(日)
 午前8時30分～
 午後5時30分
 高野山霊宝館

◎国宝 不動堂内部を公開
 〈日時〉 8月28日(金)～30日(日)
 午前9時～午後4時30分
 〈場所〉 不動堂(壇上伽藍)
 〈拝観料〉 無料 事前申込不要

〈場所〉 徳川家霊台
 (家康霊屋・秀忠霊屋)
 〈拝観料〉 200円(通常拝観料)



霊台内部壁画



家康霊屋内部の須弥壇と厨子



作品

◎長谷川智弘作品展
 ◎結びの世界「みやび」
 〈日時〉 5月1日(金)～7日(木)
 午前10時～午後5時
 〈場所〉 当館敷地内 迎賓館
 〈拝観料〉 無料 事前申込不要
 色とりどりの紐結びの世界をこ
 覧ください。



不動堂外観

お問い合わせ先 高野山霊宝館 TEL 0736-56-2029(代)

霊宝館の庭園

シキミ・檜・榎・花

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭



葉花と花



花柴と実

シキミはDNA解析によりモクレン科から分けてシキミ科・シキミ属とされた常緑の小高木です。シキミという和名の由来は、この実に有毒成分があることによる「悪しき実」が通説となっています。世界共通名である学名の一つ、*Illicium religiosum* Sieb. et Zucc. には「宗教的な強い香りのあるもの」という意

味があります。現在は檜という字を慣用していますが、古い書物では之木美、之木実、木蜜、榎、などの字が用いられていることがあります。榎は神前の献花とされているサカキ（ツバキ科）の榎に対する用字と思われます。別称や方言名には、はな（花）、はなのき（花の木）、はなしば（花柴）、

はばな（葉花）、はかばな（墓花）、ほとけばな（仏花）、こうしば（香柴）、こうのき（香の木）、まこうのき（抹香木）などがあり、多くの地方で、この樹の葉枝を仏前、墓前、仏事の供花とされ、葉や樹皮を乾燥粉末にして香料とされていた（いる）ことなどを知ることができます。

かつらぎ町花園）に木蜜あり、その葉、必ず八弁あれば八葉の木蜜（同記の別の巻では八葉の榎房花）という。この木、弘法大師が初めて植えられ、このことが花園の名の起り、また花坂村（現高野町花坂）にも八葉の木蜜があり花坂の名も、そのことによる。という意味のことが記されています。残念なことに、それらしいシキミは現在、見当たりません。花坂には昭和五十年代後半頃までは枝垂れたようになった一本のシキミの老木がありました。その木については、弘法大師が当地の山中で行法（修法）中に投じられた榎の葉枝が、小川の対岸の山裾に逆さに挿さって成長した。というので「逆さ榎」、後に、逆さを坂、榎を花として花坂の地名に。弘法大師が行法されたという処を大師山と呼ぶようになった。という、この土地での、言い伝えは、今も遺っていることを教えていただきました。

高野山塊では山麓部から山頂部に自生し、植栽もされ、しきびという方言名があります。往時は仏前、墓前の供花とされたそうですが、現在はコウヤマキが常用され、しきびの葉枝をコウヤマキに添え供える風習が、わずかに遺っています。一方、諸堂塔、各寺院、僧侶養成の道場などでは四季不断の諸行法（修法）や特別な儀式などにおいて、シキミ（檜）の葉や葉の房が花（華）として用いられています。

「紀伊續風土記」には、シキミと弘法大師や高野山の係わりについてかなり詳しく解説されています。そのうちで、花園庄（荘）（現在の、